

歴史学クラスにおける「歴史史料の読み方入門」の実践

佐藤つかさ

山口真紀

【要旨】

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの選択A・歴史学クラスでは、文語で書かれた歴史史料の読解を行っているが、例年学生からは、史料の読解を始める前に入門的な授業を行ってほしいという要望が寄せられていた。この声を受けて、2020-21年度の史料読解の授業で扱った言語事項を整理し、これをもとに、2021-22年度、2022-23年度のクラスにおいて「歴史史料の読み方入門」の授業（1回、100分）を実施した。その結果、学生にある程度の子備知識と見通しを与えることができ、導入授業として一定の成果を上げることができた。しかし、提供する情報の見直しの必要性、「入門」授業と実際の史料読解との連携といった課題も明らかになった。本稿では、この授業実践の内容を報告する。

【キーワード】

日本研究、歴史学、文語、史料読解

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（以下、IUC）には、専門分野の研究のために文語で書かれた文章の読解を必要とする学生が一定数存在している。特に、選択A・歴史学クラス¹を選択する学生には、主に歴史学、美術史、宗教学、民俗学等を専門とする大学院生が多く、古文・漢文・漢文訓読体で書かれた歴史的史料（以下、史料）の読解能力が不可欠である。そこで、歴史学クラスでは、カリキュラムに史料の読解を組み込んでいる。例年学生の興味・関心はおしなべて高く、実際の史料を読むことによる達成感も得られるが、一方で、史料読解の前提となる文語文法の知識が不十分な者や、文語文法が既習であっても文学作品とは異なる史料それぞれの形式に戸惑う者もいる。学生からは、実際に史料の読解を始める前に、史料の読み方についての入門的な授業を行ってほしいという要望が寄せられており、教師側もその必要性を感じていた。このような状況から、2021-22年度、及び2022-23年度は、コースの初めに「歴史史料の読み方入門」と題する導入授業を行った。本稿では、その授業実践について報告する。

2 実践の背景

選択A・歴史学クラスでは、カリキュラムの中心的な柱として、論文・専門書の読解と史料の読解を組み合わせて行っている。具体的には、各学生の研究テーマに合わせて相互に関連のある論文と史料を選び、週2回の授業のうち1回を論文、1回を史料にあて、1週間で一つのトピックを扱う。そして、週ごとに学生の研究テーマを順番に取り上げていくという方法を取っている²。

この方法では、学生にとって、必ず自分の研究テーマが取り上げられ、自分が読みたい論文や史料を読む機会が得られるという利点がある反面、あまり馴染みのない他の学生の研究テーマに関する文献も読まなければならない。特に、史料を読む際にはそれぞれの学生の背景の違いが大きな障壁になる。

まず、歴史学クラスを選択する学生の専門分野、研究テーマは、非常に広範で多種多様であるため、各学生が持つ知識も多様である。特定の史料を読む際には一定の背景知識が必要になるが、その知識の質と量には学生によって大きな差が存在することになる。また、古い時代の史料であれば古文・漢文の知識が不可欠であるが、その必要度は学生によって異なる。また、文語の習熟度のレベルも、まだまったく学習したことがない学生から、すでに相当量の史料を読んだ経験のある学生まで、様々である³。さらには、IUC入学以前の日本語学習経験も多様なため、現代日本語の運用能力自体にもかなりの開きがある。

その状況の中で、クラス全体で同じ文献を読むには困難な点も多いが、研究者を志す学生にとって、生の史料に触れる喜びと意義の大きさの方が勝ると感じている。また、通常、「文語文を読むための教育」というと、まず文語文法や漢文の構文などの知識を体系的に学習させ、ある程度の基礎ができたところで「例文」として適当な文語文を教師が選んで読ませるというプロセスを踏むのが一般的であり妥当でもあると考えられる⁴が、この歴史学クラスでは、まず学生が読みたい史料ありきで、実際に史料の文章を読みながら、その都度読解に必要な言語事項や史料に関する知識を調べたり教師が補ったりしていくといういわば逆方向の方法を取る。学生が選んだ史料の多様性にかかわらず、これらの知識にはある程度の共通性を持たせることができるのではないかと考え、実際の授業活動では、毎回、学生全員にとって有益と思われる汎用性の高い事項を抽出して注目させるように心掛けてきた。そして回を重ねるうち、それらの知識をより効率よく整理して提示できないかという思いを持つようになった。同時に、前述のように、学生からは史料読解の前提となる「史料の読み方」を教えて欲しいという要望が毎年のようにあったが、短時間で包括的な読み方を提示するのは難しく、実現できずにいた。しかし、網羅的なものではなく、ある程度のまとまった知識を事前に提示することによって、その後の史料読解に取り組みやすくすることはできるのではないかと考えるに至り、試みとしてこの「歴史史料の読み方入門」の授業を構想した。

3 実践の目的

「歴史史料の読み方入門」授業を実施する目的は以下の2点である。

1. 専門分野の研究のために文語で書かれた史料の読解を必要とする学生を対象に本格的な史料読解に入る前の導入として、史料の概要と読解に必要な事項を厳選して提示すること。

2. あらかじめ史料の性質や読解の方策についての「見通し」を与えることによって、史料読解に対する学生の心理的負担、調べものに費やす時間と労力を軽減し、本格的な史料読解へのスムーズな移行を可能にすること。

具体的に「見通し」として提示すべきこととして、以下の項目を想定した。

1) 「史料」と呼ばれるものには様々な種類があり、それぞれ具体的な読み方が違うこと。

例えば、以下のような種類の違いがあり、それによって必要な背景知識が異なること。

- ・形式：古文書、古記録、日記、文学作品、絵画資料等
- ・文体：漢文、和文、漢文訓読体等
- ・時代：古代、中世、近世、近代
- ・内容・テーマ

2) わからないことを調べるために様々な方策があること。

歴史史料を読むためには、一般的な日本語学習で使用している辞書では情報が足りない。学生が利用できる辞書・辞典類、参考書籍、ウェブサイトなどを紹介し、調べる手段を与えること。

4 方法

実践に先立ち、2020-21年度に行われた歴史学クラスの授業記録を分析し、学習項目の選出を行った。これを元に、100分の入門授業を設計し、実践した。最後に、学生に入門授業についてのアンケート調査を行い、この実践に対する評価を行った。

4-1 指導項目の選び出し

4-1-1 データ収集と分析方法

データは、2020-21年度の歴史学クラスにおいて、史料読解を担当した教師2名の授業記録である。教師が毎回の授業において、学生全員に共有すべき言語事項として抜き出して指導したことがらを書き溜めていった。このようにして集めたデータについて、指導され

た言語事項の種類によってグルーピングを行った。2020-21年度の歴史学クラスで教材として使用した史料は表1の通りである。

表1

中世	<ul style="list-style-type: none"> ・『平家物語』（13世紀頃）
近世	<ul style="list-style-type: none"> ・荻生徂徠「四十七士の事を論ず」（宝永2, 1705年頃） ・新井白石『読史余論』（正徳2, 1712年） ・阿佐馬之助盛勝他『祖谷山日記』（宝暦9, 1759年） ・菊池武矩『祖谷紀行』（寛政5, 1793年） ・『通航一覽』卷之三百二十一 文化十三丙子年七月 漂流人喜三左衛門、外二人口書（文化13, 1816年） ・池田寛親『船長日記』（文政5, 1822年）
明治	<ul style="list-style-type: none"> ・佐野常民・大給恒「博愛社設立願出書」（明治10, 1877年） ・久米邦武『米欧回覧実記』（明治11, 1878年） ・「學校唱歌二用フベキ音楽取調ノ事業二着手スベキ、在米國目賀田種太郎、伊澤修二ノ見込書」（明治11, 1878年） ・宮内省博物館『増補訂正 工藝志料』（明治11, 1878年） ・「教育ニ関スル勅語」（明治22, 1890年） ・『東京風俗志 中の巻』（明治33, 1900年）
大正	<ul style="list-style-type: none"> ・岡田八千代『絵具箱』序（大正元, 1912年） ・岡田三郎助「文展の女流洋画家」『婦人画報』（大正7, 1918年）
昭和前期	<ul style="list-style-type: none"> ・朝日新聞 昭和3年12月3日 大観兵式の記事（昭和3, 1928年） ・東京鐵道局 粟島英雄『ラッシュアワー展望』（昭和5, 1930年） ・紙芝居『進め日の丸』日本教育紙芝居協会（昭和16, 1941年）
戦後	<ul style="list-style-type: none"> ・木村一治「科学者の夢 原子力の新世界」（1948年） ・木村一治『核と共に50年』築地書館（1990年） ・朝日新聞 1950年7月3日 社説「国宝を焼く」（1950年） ・「平成27年9月27日 持続可能な開発のための2030アジェンダを採択する国連サミット 安倍総理大臣ステートメント」（2015年）

4-1-2 分析結果

分析の結果、指導した項目は12のグループに分けられた。以下に、グループごとに授業で指導された項目の詳細を示す。〔 〕内は授業記録における指摘数を示す。

①表記〔14〕

指導項目：旧仮名遣い、旧字体、旧漢字、国名・地名の漢字表記、変体仮名、旧漢字の調べ方

このグループには、現代日本語にはない歴史的な史料特有の表記に関する項目が含まれる。「じうけふみん（従業員）」、「けうやう（教養）」といった歴史的仮名遣いや「聲（声）」、「禮（礼）」のような旧漢字、変体仮名、「新約克（ニューヨーク）」、「費拉特費（フィラデルフィア）」といった国名・地名の漢字表記がこれにあたる。また、そもそも旧漢字や旧字体の調べ方がわからない学生のために、電子辞書、冊子体の辞書、インターネットのサイト、Windows IMEパッド等を提示し、どのように調べれば良いかについての指導もなされていた。

②助詞〔5〕

指導項目：現代語にはない助詞、助詞の省略

このグループには、文語の助詞、及び助詞の用法に関する項目が含まれる。現代語にはない所有格の「が」や、「国を樹つること（は）、博愛（を）衆に及ぼし」のような助詞の省略がこれにあたる。

③助動詞〔10〕

指導項目：現代語にはない助動詞、助動詞が含まれる構文

このグループには、文語の助動詞、及び助動詞が含まれる構文に関する項目が含まれる。「む」、「つ」、「けり」のような現代語にはない助動詞や、「AをしてV（せ）しむ」のような使役の構文などがこれにあたる。

④接続表現〔1〕

指導項目：文語の接続表現

このグループには、文語の接続表現に関する項目が含まれる。「しかれども」、「されば」、「而して」のような接続表現がこれにあたる。

⑤敬語〔2〕

指導項目：現代語にはない敬語の用法、敬語による主語の特定

このグループには、現代語にはない敬語の用法、敬語による主語の特定に関する項目が

含まれる。二重敬語、二方面敬語といった現代語の敬語にはない用法や、敬語によって主語を特定する方法について指導が行われていた。

⑥漢文・訓読体〔5〕

指導項目：漢文の表現、漢文訓読体

このグループには、漢文の表現や漢文訓読体に関する項目が含まれる。「可有之」、「乍恐」といった漢文の表現が本文に挿入されることや、「～ト欲ス」のような漢文訓読体独特のカタカナ表記、及び言い回しがこれにあたる。

⑦候文〔5〕

指導項目：候文の基本、候文に特徴的な表現、助字+動詞+「候」の読み方

このグループには、候文の基本、候文に特徴的な表現、助字+動詞+「候」の読み方が含まれる。そもそも候文とは何かを知らない学生のために、候文の基本について解説が行われていた。また、「御座候」、「候様」、「度」といった候文に特徴的な表現や、「被存候」のような助字+動詞+「候」の読み方についての指導がこれにあたる。

⑧語彙〔4〕

指導項目：現代語学習ではなじみのない語彙、単位を表わす語、既習語からの類推

このグループには、現代語ではなじみのない語彙、単位を表わす語、既習語からの類推に関する項目が含まれる。「綱紀」、「威容」といった現代語学習ではなじみのない語彙や、「尺」、「丈」といった単位を表わす語について指導が行われていた。また、語彙そのものが未習であっても、既習の漢字から語彙の意味を類推する方法（既習語からの類推「徳器」の「徳」から「道德心」を類推する等）について指導が行われていた。

⑨表現〔1〕

指導項目：現代語学習ではなじみのない表現

このグループには、現代語ではなじみのない表現に関する項目が含まれる。「以て」、「～ニ於テ」などがこれにあたる。

⑩文型〔3〕

指導項目：文語特有の文型

このグループには、現代語にはない文語特有の文型が含まれる。「～能ハズ(あたわず)」、「希クハ(こひねがわくは)～ン事ヲ」等がこれにあたる。

⑪文構造〔2〕

指導項目：文の切れ目、対句への注目

このグループには、文の切れ目、対句への注目が含まれる。一文が長く、句読点がかかれていないため、適宜自分で句読点を打つことについての指導や、文章中に多用される対句表現（宏遠－深厚、父母－兄弟、己れ－衆、古今－中外など）に注目させる指導が行われていた。

⑫現代語訳〔3〕

指導項目：現代語訳と原文の違い、現代語による解釈の方法

このグループには、現代語訳と原文の違い、現代語による解釈の方法が含まれる。現代語訳は常に原文と対応しているわけではなく意識がなされる場合があること（例：「この時を最とすべし」→「最盛期を見せた」）、また、原文を現代語に読み替えることで解釈を行う方法（例：「而してその事跡の詳らかならざる者あり。」→「そしてその事跡がはっきりしない物がある。」）⁵について指導が行われていた。

4-2 実践の目標設定

史料読解に対する学生の心理的負担を軽減させるためには、本格的な読解に入る前に4-1-2で明らかになった点について、あらかじめ学生に問題の所在を把握させることが重要である。これを踏まえて、入門授業の目標として以下の5つを設定した。〔 〕内は、4-1-2の対応する項目を示す。

1. 日本語の表記・文体について大まかな史的変遷を把握する〔①、⑥、⑦〕
2. さまざまな史料の形態、表記法を知る〔①、⑥、⑦〕
3. 漢文訓読の基本形の概要を知る〔⑥〕
4. 史料読解に役立つツールを知る〔①〕
5. 教師とともに簡単な史料読解に挑戦し、文語で書かれた史料がどのようなものかを知る〔②、③、④、⑧、⑩、⑪、⑫〕

なお、文語文法の知識がない学生が混乱することをさけるため、また時間的制約のため、⑤敬語は今回の実践では扱わないことにした。

5 実践

5-1 受講生の概要

このクラスの学生の内訳は以下の通りである。1名を除いて、北米の大学・大学院に所属もしくは卒業した学生である。（2022-23年度の1名は英国の大学院所属）

2021-22年度：7名

専門分野：戦国・近世大名史、近代医学・生物学史、近代看護史、近代メディア史、近

代少女文学、近世・近代児童文学、近代美術史

2022-23年度：11名

専門分野：中世仏教史、中世・近世仏教美術史、戦国・近世都市史、近世・近代思想史、近世美術史、近代美術史、アフリカ系アメリカ人と日本との関係史、戦後日中関係史、コンピュータ技術の発展史

5-2 実践の内容

4-2に示した1～3について講義形式で50分程度解説を行い、その後4、5について小グループに分かれ、ワークショップ形式で活動を行った。

講義

教師がパワーポイントを作成し、それを用いて講義形式による授業を行った。以下に授業の流れを示す。

(1) 導入

クラスで扱う史料が多様性に富んだものであることを理解してもらうために、数種類の史料を提示し、書かれた時代、表記の特徴、書かれた国（日本のものか、中国のものか）について、小グループで自由に話し合ってもらった。

提示した史料は以下のものである。

- ・『万葉集』 奈良時代末～平安初期 8世紀頃
- ・『源氏物語』 1008年頃
- ・『平家物語』 13世紀半ば
- ・生類憐みの令 1687年
- ・離縁状 1826年
- ・頼山陽『日本外史』 1829年

漢字の伝来から現代日本語に至るまでの表記、文体の変遷の概要を年表を示しながら簡単に解説した。その際、口語と文語の違いや言文一致についても触れ、各自が研究対象とする時代が日本語の変遷上どのような位置にあるのかを理解してもらった。

(2) 日本語の文体の概要

和文体、漢文訓読体といった文語の文体を、実際の例を示しつつ、表記との関連も示しながら確認した。

(3) 漢文訓読の基礎

実際に白文に訓点を施し、訓読し、書き下し文を作る一連の流れをパワーポイントで示し、漢文訓読の基礎を解説した。レ点、一二点について解説した。

(4) まとめ

最後に、史料にはさまざまな文体および表記法があること、現代語とは異なる文法で用いられていること、読むために活用できる様々な方法があることをまとめ、史料読解の導入とした。

ワークショップ

授業後半は、文語文法既習者と未習者の二つのグループに分かれて、『米欧回覧実記』の「第十九巻 新約克府ノ記」の読解を行った。これを教材として採用した理由は、第一に、近代の漢文訓読体の代表的名文と言われることである⁶。近代の漢文訓読体は、文語文法既習者にとってはよい復習になり、もっと新しい時代を専門とする学生にとっても触れておくべき文体である⁷。第二に、学生の興味を引き付ける内容であることである。岩倉使節団についてはほぼ全員の学生が何らかの知識を持っており、北米の大学に所属する学生として米国の事情には馴染みがある。しかし、明治初頭の日本人が当時の米国をどう見たかという点は未知の情報で興味深い。漢字で書かれた地名の読み方を想像するだけでもクラスはおおいに盛り上がる。第三に、非常に有名な史料であるがゆえに、明治11年の初版から現代の校注付きの版、現代語訳、解説書等、様々な形の出版物が利用可能であり、そのことを紹介できることも重要な点である。

授業では、各グループに教師が一人ずつ入り、文法の解説や、語彙・旧漢字の調べ方を指導した。既習グループは、学生に文語文法の復習をさせながら、できる限り多く読み進めた。未習グループは、基礎から説明を行った。疑問に思ったところを皆で出し合い、それに教師が解説を加える形で進めた。どちらのグループも、電子辞書やインターネット上の情報サイト等のツールを用いて語彙を調べる方法を確認し、文型や文構造についても解説を加えた。

6 実践の評価

授業終了後に、この実践について数名の学生からフィードバックを受け、以下のようなコメントが得られた。

- 1) 様々な一次史料を読んで、それぞれの日本語の特徴、スタイルを味わえることは、今後の研究に役立つと思います。
- 2) 日本語の豊富さもより深く理解できました。
- 3) 文語文法の復習になりました。
- 4) 先生からいただいた文法の資料が助けになったと思います。
- 5) 漢文の基本を勉強した方がいいと思います。時間のせいで、詳しくルールなどを学ぶ時間がなかったので、実際に漢文を読む時、どのようにすればいいか分からなかった

です。

- 6) 毎回史料を読む時、簡単に史料中の新しい文語文法を説明して下さるといいと思います。
- 7) 授業の時もっと一緒に配っていただいたものを活用して、解説すればと思います。
- 8) 史料の種類についてもう少し説明を加えたらさらに勉強になると思います。具体的に言うと、漢文はこういう場合によく使われるとか、江戸時代の史料は実は中世よりも崩し字で書かれているものが多いとか、そのような情報が役に立つと思います。

1)~4)の指摘から、準備の機会を持てたことは一定の成果があったことがわかった。一方、5)、8)のように、授業で提供された情報では不十分であったという指摘もあった。さらに、6)、7)のように、この入門の授業と実際の史料読解をどう結びつけるかという課題も浮かび上がった。

7 今後の課題

以上の評価を踏まえ、「歴史史料の読み方入門」の授業は今後も引き続き実施し、授業で提供する情報の精査・見直しを行いたいと考える。また、5)の指摘と関連して、ワークショップで行ったような学生自身の主体的な活動の比重をより高くすることも検討したい。

具体的には、

- ・紹介すべき事項を見直し、充実をはかる
- ・特に、内容の理解に背景知識が重要であることをより明確に示す
- ・ワークショップを充実させるために、回数を2回にすることも検討する

などが考えられる。

また、本格的な史料読解を行う際、学生がこの入門の授業で紹介された情報を具体的な読解作業に結びつけて利用できるよう、その方策についても考えていきたい。

さらに、この実践を継続することによって、史料読解に必要な知識とスキルの検証を進め、将来的には、歴史史料読解のための教材開発につなげたいと考えている。

注

- 1 レギュラーコース全体のカリキュラム、およびその中における選択Aコースの位置づけについては、秋澤委太郎 (2023)「2022-23年度レギュラーコースカリキュラム報告」
<https://iucjapan.org/pdf/nenpou2023_Akizawa.pdf>
および「レギュラーコースカリキュラム」
<https://www.iucjapan.org/html/curri_regular_j.html>を参照。

- 2 歴史学クラス全体のカリキュラムは、「授業概要 選択A・歴史」
<https://www.iucjapan.org/syllabus/hp_syllabus_rekishi.pdf>を参照。
- 3 レギュラーコースでは、古文・漢文の基礎の習得のために、別途、選択クラスとして「文語文法」「漢文」のクラスを設けており、必要な学生はほとんどが履修する。しかし、選択Aコースと並行して開講されるため、歴史学クラスで史料を読み始める時点では、まだほぼ未習の状態である。また、クラスには、研究上文語の史料を読む必要がない学生も存在するが、漢文訓読体などいわゆる近代文語文には触れておく意義があると考え、教材として提供している。実際の授業運営では、文語の必要度や習熟度によってグループに分け、読む量や読み方を変えて指導している。また、文語未習グループには同時に現代語訳や解説を配布したり、史料と関連付けられる現代語の記事に差し替えたりする工夫をしている。
- 4 例えば、佐藤他（2016）に、4校の取り組みが紹介されている。
- 5 海外の教育現場では、解釈の際に、現代日本語を介在させず、原文を直接学習者の母語に翻訳する方法を取るところが多く存在する。（山口2020）
- 6 例えば、齋藤希史（2014）『漢文脈と近代日本』角川ソフィア文庫、pp.123-129
- 7 庵（2020）では「近代文語文」と呼び、専門として文語文を読む必要がない学生であっても、これを読むことの意義を述べている。

参考文献

- 佐藤勢紀子他（2016）「日本学専攻学習者を対象とする文語文教育」『専門日本語教育研究』18巻 pp.55-60
- 庵功雄（2020）「近代文語文を素材とする教育実践に関する一報告」『日本語教育』177号 pp.77-91
- 山口真紀（2020）「外国人日本研究者の古典日本語の学習と理解の研究」東京工業大学 博士論文